

天の国は

心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人たちのものである。

— マタイによる福音 5。3 節 —

いきなり、入院になった。寒気がとれないと思うだけで、自覚がなかったから、しかたない。

このまま気づかなかつたら、危なかつた、と医者が言った。右肺に肺炎をおこし、左肺に胸水が溜まっていた。

3年前に、癌ごと左肺を取つて後、翌年右肺下に再発が認められたが、放射線も手術も難しい個所なので、抗癌剤治療を勧められた。セカンドオピニオンも歩いて、治療を止めた。

今回は、オーバーワークが原因だったと思う。非常勤に切り替えて勤めている学校だが、仕事は、頼まれれば嬉しいし、やりがいを感じて楽しかったのだから、しかたない。

山形県S市での大会遠征を、部の若い監督に頼まれた。初日の予選を勝ち抜き、二日目の朝には行くから、決勝トーナメントに残っていてほしいという。これは久々に燃えた。関東・東北の強豪校がこぞつて参加する中、チームを負かすわけにいかない。監督席で緊張と興奮の頂点にあった。福島と新潟、千葉の、いずれも各県1〜2番手を相手に、勝ち残り、翌日の試合につなげた。すがすがしかったが、エネルギーは、ここまだった。

夕方、止宿した鶴岡のホテルへ。夕食は各自で調達。その方が気楽だった。部員は固まって食堂を探し当て、さっそく入った。ひとり駅の方へ。飲み屋ばかり。駅で蕎麦を食い、偶然見つけた大きなスーパーで買い物して、迷子の遠回りまでして、やっと部屋に戻った。まずシャワーだと、浴室に入るや、激しい悪寒に襲われ

て、しばらくしゃがみ込んだ。―思えばその時肺炎にかかっていた。―

翌日は、監督をバトンタッチして、お日様のあたる芝生でうとうとした。

帰宅した夕暮れ、クロ(オス猫)の様子がおかしいと家内が言う。外にいるクロを呼んでみると、畳に伏せたまま、動くのが大儀そうだった。これはダメだな、連れて行こう、と駅前の夜間動物救急病院へ連れて行った。胸に水が溜まっています、と告げられて一晩入院し、翌日からは世話になつて動物病院で一週間酸素室に置かれた。―それで回復したし、いいお値段だった。

遠征の翌日、授業のテレビ取材が入っていた。選挙が近いことで、受諾していたので、グループ学習のかたちで進めさせた。この日あたりから、せきが止まらず、血が多く混じっていた。鼻をかんでも、唾を吐いても、多量の鮮血が混じった。

どうも熱っぽいのがとれないと、町医者に行き、入院にいたった。

クロも私も、胸水が溜まり、呼吸障害をおこした。同じ症状なので、家内が驚いた。

クロは、私のところを目指してやって来た猫だった。

ただ、クロは一度ですんだが、油膜施術と肺炎治療を中心に、11月と12月2度入院した。

血痰は収まらなかった。食欲はあったが、15キロ痩せた。みすばらしい自分の裸を眺めて、がっかりした。

仕事へは、行くのがやつとだった。おまけに、ぎっくり腰まで起こして、まともに歩けなかった。しかし、3月までは勤め上げたかった。だから、医者の言うことを聴かずに、続けた。職場に最大限に配慮してもらい、階段は上らず、教室はすべて一番近く、1時間授業したら、保健室で1時間休んで、もう1時間授業して帰宅した。声を出しても、終いまで続かないが、ゆっくりゆっくり3月まで、通した。

12月に、担ぎ込まれるように、入院したとき、医者が、家内に向かって激怒した。

―だから、あれほどすぐに治療に入るように言ったのに、癌が腰にまで転移している可能性がある。

検査結果は腰痛だった。―腰痛持ちなんですね、のひと言で終わった。

それでも、また胸水が溜まり、肺炎を併発して、全体に悪い状態だった。

「あなたは、ダメかもしれないこと、かえつて命を縮めるかもしれないからって、効果あるかもしれないこと(抗癌剤治療)をどうしてそんなにためらうのです

か。仕事なぞより、体力のあるうちの、治療に入るラストチャンスです。」

医者はそう言ったが、目の前の仕事をやりきることに、こだわった。また、抗癌剤治療はしないと、家内と決めていた。返事を聴いた医師は、治療が落ち着いたら、もうここではなく、緩和ケアのクリニックへ移ってくれと言った。そうだろうな、と思った。

「肺炎の原因が癌のせいならば、癌が進行する限り、肺炎はよくなるならない。癌による症状(肺炎も含めて)で、身の回りのことが大変になっているので、ここから先は、どんな具合が悪くなる可能性がある。ここから先は、いつ倒れて、そのまま亡くなってもおかしくありません。」

おそらく、春までは持たないでしょう。

年内になくなる可能性もあります。

もちろん、医者の子想は外れることも多々あります。」

その後、エレベーターで、前に世話になった医師に家内が出くわしたとき、

「(抗癌剤やつても)2ヶ月ぐらい延びる程度です。」と、ボソッとつぶやいて行ったという。

その医師の名が、ひと月後、病院の医師名簿掲示一覧からなくなっていたのは、ご栄転のためなのか知らない。

3年前に自分の知っている7階の外科病棟は、いつも、誰か患者が歩いていて、にぎやかな感じがした。午前の定時になると、胃腸科と呼吸器科の外科医たちが、勢力を競うようにして、廊下を闊歩して病室を回っていた。ちよつとした迫力があつた。

手術後に病室に戻ると、リハビリと称して、すぐにも廊下での歩行訓練をさせられた。

「後は、ご自身で回復に向けてください。」

お後がつかえているので、と言わんばかりに、なるべく早く退院させられた。したがって、7階の廊下は、一日中、生きることに向けて、殺気立っていた。看護師たちの活気よい声も響いた。

動から、静へ。

6階は、静かな内科病棟だった。

「今日も、ベットが一つ空になっていた。」と、言いながら家内が見舞いに来た。静から、寂へ。

時に、7階から、6階へ戻り。しかし、それをくり返す人は、たくさんではなく、多くは6階で入院をくり返し、治療と放射線をくり返す。そして、寂滅の別れを告げて、自宅へ向かった。

11月下旬の夕暮れ。外の、低いビル群の先には、仙台観音が見え、さらにその先に、白くなり始めた泉が岳が眺められた。自分の病室の窓側には、隣のちょうど6階建ての研究棟の、屋上のフェンスがあった。そこに何やら感じてふり向くと、一羽の大きなカラスが、フェンスにつかまり立ちして、間近にこちらを覗いていた。そして、私をじっと見つめたまま、動かない。

私の方も、カラスと目が合ったまま、ヒヤツとして、真剣にたずねた。

「むかえか？」

カラスは、返事をせずに、やはり動かない。

「もう少し、先か？」

カラスは、返事をせずに、しばらくして向きを変えて、立ち去った。

その晩、夜中に耳元で、クロ(飼い猫)の鳴き声が出て、目が覚めた。

12月の胸水抜きには、苦しんだ。主治医ではなく、研修医が油膜施術の処置をした。若い医者のおそらく初めて管を入れる、小刻みな手の震えを、施術中ずつと感じて緊張していた。主治医は顔出しせず、若い男の看護師が付き添った。終了までこぎつけて、よし、と言ったが、その後が長かった。

「えつ、なんで？ マジで？」

と、始まった。それから、長い時間、管のわきから漏れるテープ修正にかかった。

「はい、終了です。」と言って、出て、その医師は、その後退院まで、一度も様子を見に来なかった。

その晩から、左肺下部の痛みが止まず、薬も効かず、眠られなかった。

病室は、ナーステーションソソの、小さな二人部屋に入れられ、隣の気難しいオヤジに、呼びたてられた看護師たちの出入りが忙しかった。オヤジは、弟らしき人が来ると、口調の荒い声で怒鳴りつけ、それだけで聴くに堪えなかったが、抗癌剤のせい、夜な中、息苦しいせきの止まらないのは、さすがに気の毒だった。

入院中は、食事を中心に時間が流れ、自然とよく寝られた。午前も午後もうとうとし、夜は夜で別の眠りに入った。特に、午後6時の夕食後の楽しみは、翌朝8時の朝食である。プラスチックのどんぶりの熱々ごはんが、この上なく楽しみだった。

それを楽しみに、夜の睡魔が襲う。ウトウトしていく。長くて15分。痛くて、同じ姿勢で居られない。スーツハーツ、スーツハーツ。左に管を入れているから、右を向く。15分。ウトウト。苦しい。スーツハーツ、スーツハーツ。しかたないから、うつ伏せになってみる。ウトウト。苦しい。スーツハーツ、スーツハーツ。

隣のオヤジの咳が止まらない。夜中は響くから、カーテンの出入りが忙しい。当直の女医がやってきて、抗癌剤、ちよつとストップしましょう。そう言っ出ていった。

スーツハーツ、スーツハーツ。自分の方は、騒ぎに息を潜めるようにして、呼ばなかった。向きを変えて、うとうとし、苦しくなつてはまた向きを変えた。枕の位置を反対側へ。管を入れた左肺の下部が、際限なく痛み続けた。正座したまま、しばらく寝た。スーツハーツ、スーツハーツ。これらをくり返すうちに、この動作そのものに疲れ果て、意識の外へ。気づくと、朝だった。

翌晩には、この終わりのない、痛みの循環の中で、ふつと、もうすぐ自分も入るかもしれない、身近な先祖様のオールキャストが過ぎつた。一とつ、母が思い浮かんだ。自然と、引き込まれるようにして、泣きだした。声は出さなかつた。しかし、声からして泣いた。痛いよう、痛いようと。62歳と1ヶ月の男が、傷が痛くて、母を思い出して、声を立てずに、声を絞りきつて、涙が枯れるまで、泣き続けた。スーツハーツ、スーツハーツ。隣の、カーテン越しの咳も、いつしか止んでいた。

翌日医者が、経口薬に代える、とお詫びしていった。痛みが、引いた。

自分は、天の国に、宝を積むことが、唯一の大切なことのように、思ってきた。また、懸命になつて働くことが、他の人の幸せになることだと思ってきた。しかし、今ある自分は、「残りの時間」と自分のことばかり考えていた。そこに、人のことを思うゆとりが入らないなど、それが、自分の人生につき込んできたものだと思うと、しおたれてしまう。

幸せは、何処にあるのだろう。それは、その人の実感として、感じ取られるものでなければならぬ。天国行きのバスに、急ぎ飛び乗らなければ、逃してしまふことだろうか。

この半年の間に、自分の身に起きた怒濤のような日々を、ふり返るだけで、目まぐるしかった。その入院中、妻はずっと付き添ってくれた。夕方からパートのある日も、毎日来て洗濯物を取り、持参の弁当と一緒に食べて帰った。関東にいる娘は、孫娘を使って、ジイジのご機嫌うかがいをさせた。会社の海外駐在員の息子は、かけ放題のタブレットを使って、オヤジはどうだ？と、毎日連絡が入った。辞めることにした職場でも、トップの上司の指示で、ほとんど動かないでも仕事が出来た。また、心配する教え子たちには、大丈夫だからそのうち集まるねと、伝えた。

古くからの友人たちは、均等に分けたつもりもないのに、中学から大学まで一人ずつ。心配して頻繁にメールで連絡をよこした。中高で剣道仲間だった工

は、入院の状況を伝えると、1週後には、見舞いに現れた。岩手で遠距離ではないといえ、病院の事務長をやっている男、忙しいから来んていい、と言つても聞かなかった。お見舞いを置くと少し話して、日帰りで帰って行った。退院して自宅養生していると、数週に一度の土曜日は、肉だの果物だのを持って現れ、一緒に過ごして帰った。

東京の大学時代に、散々迷惑かけたSは、薬のこと、食べものなどなどを、三日とおかず延々と注意事項を力説してよこした。ポンチョが届いて、それで夜は温めて過ごし、ダウンハーフコートの上下で、仕事に行くのに軽くなった。椎茸茶が効くとなると、定期で届くようになった。おいしくないから溜まっただ。もういらぬ、と頼むと、その後、ナッツと無添加トマトジュースが大量に届いた。処方箋メールがビッシリ付いていた。身体を冷やさないノーハウから細々したことまで。家内が「Sさんが女だったら、私は負けていた。」と言っている、伝えたら、「意味分からん」とひと言かえってきた。それでも、三日も連絡が途絶えると、心配してメールをよこした。パソコン音痴の自分の希望を受けて、連休全部を費やして、自分のホームページを作ってくれた。

これだけの、幸せ者が、そんなにいるだろうか。

天の国は、自分のそばに。また、自分の中にある。見えないところへの、憧れや期待のことではない。